

未来<sup>眼</sup>やまがた 

第20回

## 隣の国・地域とどのように付き合うか

「グローバル」（グローバルとローカルを合わせた造語）という言葉は、地球規模に考え、地域視点で行動するという意味を持つ。18歳でアメリカに渡り、日米移民問題、日中問題など幅広いテーマで作家・評論活動を行い、近年は秋田を中心に地域づくり仕掛け人として活動している石川氏はまさに「グローバルの人」である。どのような視点で世界を見て、山形・秋田の地域の可能性と課題をどのようにご覧になっているかがあった。

## アメリカと中国の間で日本は

●町田 中国に多くの人脈を持ち、日中の橋渡しをされてきたのは、どのような経緯から

だったのですか。

●石川 ちょうど10年前、たまたま通訳をしてくれた外交部の方との出会いを通じ、多くの中国の要人に会う機会を得られたのがはじまり。その後、日中国交正常化30周年記念と35周年記念の企画委員長としてさまざまな日中交流イベントを開催した。また「新日中友好21世紀委員会」の委員として、中国政府の要人と会うことのでかかわりが広がった。

●町田 それは先生が若い時にアメリカで生活したことや、また日本の政治にお詳しいということだけでなく、先生のパーソナリティ、つまり人間的な魅力がきっかけになっているのでしょうか。

●石川 確かに、出会った中国の要人と多くの議論をし、率直にさまざまな意見交換をした。多くの日本人が記念写真を撮ることだけで付き合っているのに比べて、珍しかったのかもしれない。

●町田 先生はアメリカと中国を等距離でみることができるとお立場ではないかと思っているが、2つの国の文化や文明をどのようにみられるのですか。

●石川 アメリカと中国は「最も似ていて」、「最も似ていない」国といえる。最も似ていないのは、中国が古代以来3,000年続いている「最も古い国」、かたやアメリカは「最も新しい国」という点である。

一方、13億の人口規模の中国は、55の少数民族が合わせて1億人以上もいて、その人々は自分たちが中国人であるとは思っていない。アメリカがアフリカや南米など多様な国から人が集まり国家が形成されているように、中国も多様な民族が国家を形成している点がアメリカと中国の似ているところだ。

●町田 アメリカは多民族国家、しかも移民大国でありながら「1つのアメリカ」として統一性を保つことができているのはなぜですか。

●石川 アメリカの場合「はじまり」が良かった。「今までにないものを、みんなで作ろう」とめざして国家づくりがはじまった。今もなお「われわれはまだ、国づくりの途中だ」と言われており、それが「1つのア

町田 睿

フィデア・ホールディングス

取締役会議長



石川 好 (いしかわ・よしみ)

1947年、伊豆大島生まれ。作家、評論家。65年に渡米し、アメリカカリフォルニア州の農園で4年間働く。帰国後、慶應義塾大学法学部卒業。83年に作家デビュー、89年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。95年の参議院議員通常選挙では、新党さきがけの公認候補として立候補。2007年まで6年間、秋田公立美術工芸短期大学学長、2009年まで「新日中友好21世紀委員会」などを歴任。2009年より酒田市美術館館長。

メリカ」として統一しやすくしているのだろう。

●町田 中国とアメリカとの関係は日本にとって重要な課題であるが、これから日本はどのような対応をすべきだろうか。

●石川 日本は「日の出ずる国」といわれたように、中国からみれば日が昇る国、つまり中国の外側にある一国に過ぎなかった。それが、明治維新となって突然ヨーロッパ型の文明と国家を作りはじめた。その後、自信を持った日本は「自立だ」といって世界大戦という大変な時代に突入した。

第二次世界大戦後は、アメリカの外側の国となり、国家体制や生活様式を作ってきたが、いまアメリカが行き詰まってきたところで、日本は再び中国の外側の国に戻りつつある。この勢いは止まらないだろう。

●町田 昨年末にNHKでドラマ「坂の上の雲」(第1部)が放送された。明治維新後の日本は「坂の上の雲」を懸命に追いかけたが、今は下り坂の局面にある。

日本の元気や自信をどうやって取り戻すのか、日本はこれから何を誇りとして生きるべきかが問われる時代になっているのではないか。

●石川 おっしゃるとおり。確かに、あの時の日本は中国の文明圏から脱して、ヨーロッパ型の近代国家という坂を登り、最終的に「経済大国・第2位」に登り詰めた。日本にとって戦後がまさに「坂の上の雲」への到達であった。

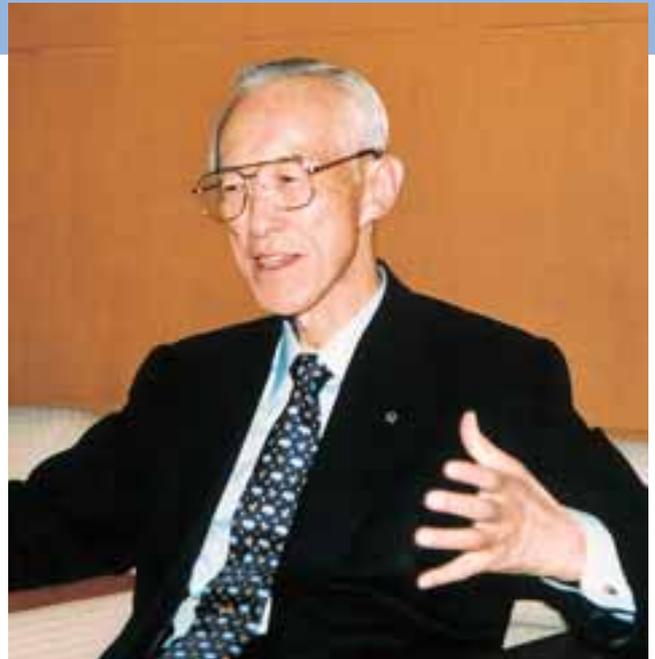
だが今は、その坂の下にあった「谷底」に目を向け、中国との接し方を再考せよという時を迎えているのだろう。

## 中国抜きで解決できない日本の問題

●町田 日本は少子高齢化が進み、急速に人口が減りはじめていますが、やがて訪れる本格的な人口減少問題を考えると移民問題を避けて通れないのではと感じている。この課題をどのように考えたらよいか。

●石川 20年前、私は外国人労働者などの問題が登場してきた時に、先頭きって「早く移民問題に取り組み。経済が豊かなうちにやらないといい人材が集まらない」と言ってきた。しかし今となっては「時すでに遅し」の感もあるほど、移民問題は後手に回っている。

●町田 日本の国家戦略はいつから欠落したのか、それとも、そもそも国家戦略がなかったのかもしれない。しかし、はっきりしているのは、戦後日本は「経済一流、政治三流」といわれるように、経済中心の国家づくり



町田 睿 (まちだ・さとる)

1938年、秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年株式会社荘内銀行取締役副頭取、1995年取締役頭取に就任、2008年より取締役会議長。2008年取締役会議長を経て、2009年10月1日より、フィデア・ホールディングス取締役会議長・北都銀行取締役会長。

の結果、さまざまな現象や問題が現れてきたことだ。

●石川 日本が抱えている深刻な人口減少の状況は、他の先進国がこれまで経験したことがない問題。そのため、日本は初めて自分自身で問題を解決しなくてはならない岐路に立たされている。

だが私は「人口減少の問題を突破できれば、日本には希望がある」と思っている。その前提は日本に人が来ること。それは中国をはじめとしたアジア諸国から日本に人が集まるということになるだろう。

また、日本の財政についても国債を外国に買ってもらわなくてはならない時代がやってくる。その時、日本の国債を買ってくれる力のある国は中国しかない。日本は中国に国債を買ってもらわなくては予算が組めない時代が、もう目の前まできている。日本の問題は中国抜きには解決できない時代がやってくる。

●町田 かつてサミュエル・ハンチントンは著書「文明の衝突」で、中国は中華文明、日本は日本文明と区分されたが、歴史的にも日本は中国の影響を大きく受けながら、日本文明をはぐくんできたことは間違いない。

●石川 日本人のなかには「中国人は怖い、よく分からない」というイメージを持っている人が少なくない。今までは仕方なく中国と付き合いしてきた面があるが、これからは、経済、政治、日米関係を含めてあらためて「中国とどう付き合いしていくのか」を考え直す時期が来ている。

●町田 かつて聖徳太子が「日の出ずる処の天子、書



山形・秋田の共有財産「鳥海山」

を日没する処の天子に致す。恙なきや」と手紙を書いて中国を激怒させたことがあった。「正しい中国との関係」をどのように構築するかは重要なテーマだ。

●石川 そのために、国をあげて中国との付き合い方を考えなくてはならない。それゆえに日本は、かつて明治維新で欧米と新しい交流を始めた時と同じエネルギーで、中国との付き合い方を研究しなければならない。同じアジアでも日本と中国は全く異なる。日本が巨大な中国を理解するのは大変難しいことなのだ。

## 可能性の宝庫 “山形・秋田”

●町田 さて、国際的な話題から地域的な話題にテーマを移すと、先生は「北前船コリドール構想の提唱」や、2001年から07年まで秋田公立美術工芸短期大学学長、また昨年から酒田市美術館館長として、山形、秋田とはさまざまなお付き合いがあるが、山形や秋田に対する評価はいかがか。

●石川 私にとって評価は高い。それは好きになったということが非常に大きい。好きになった理由はいくつかあるが、「可能性がある」ということが一番の理由。山形や秋田ほど可能性があるところはない。

しかし、その可能性に地元の人には気づいていないのか、あるいは気づいていないふりをしているのか分からないが、良いプロデューサーがいれば大変面白い土地になるというのが、山形と秋田に対する私の評価だ。

●町田 その可能性を生かすためには何が必要でしょうか。

●石川 そのためにはまず「隣とうまくやらなければならない」。秋田でいえば青森、岩手、山形と付き合いができてはじめて、その地域の資源が生きてくる。

だが実際には山形も秋田も、東京で何が起きているかばかりに注目して「隣は何をする人ぞ」というのが現況だ。

例えば、「農業の強化」という課題がある時、県は何か新しい農産物はできないかと、年間何億円もかけて米を研究するなど新しい事業をやっている。しかし、100キロも離れていない隣県でもまったく同じ取り組みをやっていることがある。同じような課題があれば、隣県と協力して「米はわが県がやる」「隣県では木材をやる」というように事業仕分けをすべき。そうすれば地域連携ができるし、県の予算を無駄にすることはない。

## 連携のカギは「隣を知る」こと

●石川 観光も、各県がそれぞれ「わが県に来てくれ」とバラバラに韓国や中国へセールスしているが、山形、秋田県の良いところをそれぞれを組み合わせ、地域が連携して楽しめる観光コースを作って、セールスに行くべき。日本海側にある大学は「学生が来ない」と嘆いていないで、大学が単位互換制度などを通じ、県境をこえて連携すればいい。

つまりお互いがリソースを提供しあって連携する。環境や教育のリソース、人的なインフラのリソース、これらの資源を共有財産にすることが重要だ。

例えば、秋田の教育が全国1位というのは、全国に誇れる素晴らしいリソースである。これを活用して全国から、中学生を秋田に国内留学、つまりホームステイさせてみるというアイデアはどうか。秋田の優れた教育環境で学び、農業などを体験しながら生活する。「秋田にホームステイさせましょう」という運動を今後広げたい。

●町田 国と地方はバラバラ、地方同士もバラバラの状態。これから地域連携を機能させるためには、「旗振り役がない」ことが最大の問題点かもしれない。

●石川 私は先日、ある首長に「隣の県の議会に挨拶に行きなさい」と提案した。隣の県で「わが県はこういう問題を抱えている。しかし、この問題はわが県だけで解決できるものではない。皆様の県と協力しながら、これこれの方針でこのようにやりたい」と言うべき。そのような地道な連携なくして、いきなり「道州制」と言われてもうまくいくわけがない。

●町田 道州制や地域連携は、行政サイドからだけでなく、先生のおっしゃるような柔軟な発想や地道な取

り組みから自然に生まれてくるのかもしれませんがね。

●石川 「地方の時代」とか「地方主権」といっても、まだ地方は中央ばかりをみている。まず隣と連携してこそ地域主権だ。隣を知らないで、道州制、地域連携、地域主権はうまくいかない。

## やったことがないから面白い

●町田 先生は新しいことにチャレンジするエネルギーをお若い時だけでなく、今もお持ちですね。

●石川 要は能天気だからだろう。短大の学長を引き受けた時、秋田には縁も知り合いもなかった。

たいてい短大では学長を務める人は、最低でも国立大の学部長経験を持つ人がやるものだが、私は教壇に立ったこともなく、ある面、無免許運転で6年間大学改革を行った。しかしそれができたのは「やったことがないし、面白そうだから」という好奇心と、この地域が好きだという強い思いだけ。

●町田 先生の自由かつ達さと自信は、18歳で単身アメリカに行かれた時と今と変わらないのでは。

●石川 たぶんそうだと思う。18歳でアメリカに行った時は、言葉も分からないし、「百姓をやれ」といわれても経験がない。知らないことは知らないし、知らなければ教えてもらえればいい。そして実践で身につけるしかない。それは、何歳になっても同じだと思う。

## 地域づくりは自分たちの手で

●石川 これまで日本中を歩き回ってきたが、東北は実に魅力的なところ。なかでも山形や秋田には、日本の一番懐かしい風景、日本人の原風景がある。その原風景が廃れては日本が日本でなくなってしまう。

●町田 実はその魅力を自覚できていないのが東北の問題点かもしれない。私が「交流人口を大事にせよ」と言っているのは、まさにそのことが理由にある。

自分とは違った人、異なった考えの人との交流を通じて、「自分は何者か」ということが少し分りかけてくる。そのことが非常に大事ではないかと思う。

●石川 地元の人には口をそろえて「ここは何もないところ」と言うがそんなことはない。学長を務めた短大では1学年150人、そのうち100人近くが県外生だった。県外生の90%が卒業時に「学んだことを生かせる仕事ができれば、秋田に残りたい」と言っていた。

しかし、秋田では仕事がなく、卒業すると県外に出



「ハタハタサンバ」で秋田を盛り上げよう（写真：男鹿市商工会）

ざるをえなかった。学長の任期が終わっても、秋田でいろんなことをやりたいと思ったのは、それが理由でもある。「何かやりたい」と言う若い人たちに応える地域でなくてはならない。

しかし、最近面白い動きが出てきているようだ。男鹿の名物「しょっつる」をイタリアで売ろうと「しょっつるパスタ」を作ったところ好評で、フォーラムも開催された。また、男鹿の温泉組合ではご婦人がおそろいのTシャツで「ハタハタサンバ」を踊って観光客を歓迎するという取り組みがはじまったという。地元の資源を生かした面白い取り組みだ。

このような動きは「地域おこしは自分たちの手でやるんだ」と、地域の人が目覚めはじめたことのあらわれだろう。

●町田 最近、首長にお会いして感じるのは、首長が町おこしに積極的だということ。昔のように「よろしむべし、知らしむべからず」なのかと思ったらそうではない。首長のなかには「俺らも何かやろう」、「自分たちで地域づくりに取り組んでいかなくては」と、燃えている首長も出てきた。

●石川 情報があれば人は動き出すし、またきっかけさえあれば人は動き出す。そのためにこれからも地域が元気になるための「情報」、「きっかけ」、「機会」を提供したいと思っている。

今年から「秋田再生会議」を立ち上げる。仮に住民が1,000円会費を払って地域づくりに参加する取り組みが始まれば、他にも地域を元気づけるさまざまな動きが出てくるだろう。

●町田 先生のお話から元気と勇気をいただきました。本日はありがとうございました。